

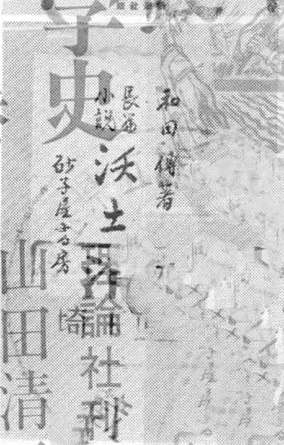
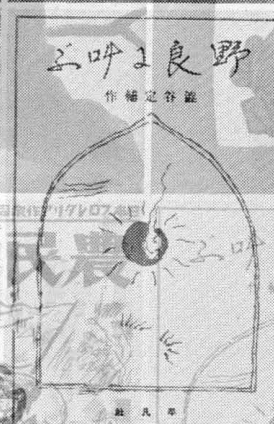
0091-90205-8924

理論社刊／1600円

代日本農民文学史

理論社刊

山田清三郎著



山田 清三郎（やまだ せいざぶろう）

1896年 京都市に生まれる。独学。

1922年 伊藤恣とともに『新興文学』発刊。

1923年 『種蒔く人』同人。

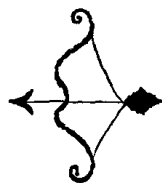
以後『文芸戦線』『戦旗』などの編集。

1939年 敗戦まで〈満州〉生活。

1945年 50年までソヴェト抑留生活。

「転向記」全3巻ほか多くの著作あり。

現住所 〒166 東京都杉並区和田 2-42-5



近代日本農民文学史 下巻

著 者 山田清三郎

制 作 小宮山量平

発 行 山村光司

発 行 理 論 社

東京都新宿区若松町一〇四
電話（二〇三）五七九一（代）
振替 東京九一五七七三六

一九七六年十月

第一刷 〓 発行 〓

一九七六年初版

0091—90205—8924

目次

第五章 プロレタリア文学運動を背景に

(一九二七—一九二九)……………7

1	農民文学の領域に台頭してくるプロレタリア作家……………	8
2	西光万吉の一連の劇作品、里村欣三の「娘の時代」……………	9
3	真船豊と永田衡吉の農民劇作……………	19
4	本庄陸男の「北の開墾地」その他……………	26
5	山本勝治の「十姉妹」、黒島伝治の二つの作品……………	33
6	この時期のプロレタリア文芸団体の動き……………	39
7	鶴田知也「海鳴り」ほか、平林たい子の「夜風」……………	45
8	立野信之、中野重治、鹿地亘の諸作品……………	50
9	丸山義二、壺井繁治、猪野省三、細野孝二郎の作品……………	60
10	片岡鉄兵と間宮茂輔の作品……………	67
11	小林多喜二の「不在地主」と「防雪林」……………	73

第六章

昭和五、六年の作品と農民文学理論

の展開（一九三〇—一九三二）

12	和伝、大田卯、悦田喜和雄、佐左木俊郎の作品……………	82
13	この章のまとめ……………	92
1	この時期のプロレタリア文学・文化戦線のこと……………	96
2	今野大刀、今村恒夫、長沢佑らの詩作品とその生涯……………	103
3	藤森成吉の「蜂起」、立野信之の「情報」ほか……………	119
4	作家同盟中央委の芸術大衆化に関する決議……………	123
5	細野孝二郎の諸作品と武田麟太郎の「荒っぽい村」……………	126
6	徳永直の「豊年飢饉」、江口渙の「地主の誕生日に」……………	135
7	金親清、片岡鉄兵、須井一、貴司山治の作品……………	143
8	小林多喜二と徳永直の作品……………	153
9	ナップII作家同盟の農民文学理論と『農民』派の主張……………	159
10	わたしと宮本顕治とのめぐりあい……………	172
11	労芸の作家伊藤貞助、黒島伝治の作品……………	177
12	同じく労芸の諸作家の作品……………	185

第七章 農業恐慌・農村危機の深まるなかで

(一九三二—一九三三) 205

13	寺神戸誠一、井伏鱒二、和田伝の作品……………	195
14	この章のまとめ……………	203
1	コップと文化運動……………	206
2	八田元夫、立野信之、長沢佑の作品……………	211
3	村山知義の「志村夏江」と和田勝一の「大里村」……………	220
4	小林多喜二の「沼尻村」……………	224
5	須井一の二つの作品……………	229
6	佐々木一夫の「発端」、細野孝二郎の「救農工事」……………	233
7	鈴木清の「母達の示威」……………	238
8	立野信之と中野重治の作品……………	242
9	橋本英吉「涙川流域」、須井一「恐慌以後」……………	248
10	伊藤永之介「濁り酒」「裸の土地」……………	253
11	五十公野清一「庄内平野」、平林たい子「救農工事」……………	257
12	平田小六「囚われた大地」……………	264

第八章 プロレタリア文化運動の解体の前後

(一九三四—一九三九).....271

終章 本書のまとめ

1	はじめに.....	340
1	プロレタリア文化運動の解体とその後.....	272
2	佐々木一夫、江口渙、橋本英吉の作品.....	278
3	和田伝の「村の次男」「祖先」「沃土」.....	286
4	平田小六の「童児」と「凶作地帯」.....	292
5	鈴木清の「あらしの村」.....	298
6	島木健作の「黎明」と「県会」.....	302
7	丸山義二の「貧農の敵」.....	311
8	石川達三の「日蔭の村」.....	316
9	久保栄の「火山灰地」.....	321
10	本庄陸男の「石狩川」.....	327
11	作品が語る北海道農業と農民の歴史.....	334
	本書のまとめ.....	339

索引

2	概 括 (明治期)	341
3	概 括 (大正期)	347
4	概 括 (昭和期)	353
5	再検討 (明治期)	358
6	再検討 (大正期)	364
7	再検討 (昭和期)	370
8	全体の展望 (一)	375
9	全体の展望 (二)	381
10	終りに	389
		404

△凡 例▽

- 1 農民文学史に主要な関連のある人名と若干の文献をその作品・評論について叙述してある個所に太字で示した。
- 2 作品名・書名は「」、新聞・雑誌名は『』を用いた。
- 3 年月日・統計数字は算用数字方式とした。
- 4 引用文は現代かなづかいに改め、新字体を使用した。また反復符「々」は用いたが、「ゝ」「／＼」は用いなかった。
- 5 本文・引用文を通じて聯は連を用いた。
- 6 索引は上・下巻を一括して下巻に付することとした。

(編集部)



戦旗社版（昭和五年九月刊）

- 1 農民文学の領域に台頭してくるプロレタリア作家
- 2 西光万吉の一連の劇作品、里村欣三「娘の時代」
- 3 真船豊と永田衡吉の農民劇作
- 4 本庄陸男の「北の開墾地」その他
- 5 山本勝治の「十姉妹」、黒島伝治の二つの作品
- 6 この時期のプロレタリア文芸団体の動き
- 7 鶴田知也「海鳴り」ほか、平林たい子の「夜風」
- 8 立野信之、中野重治、鹿地亘の諸作品
- 9 丸山義二、壺井繁治、猪野省三、細野孝二郎の作品
- 10 片岡鉄兵と間宮茂輔の作品
- 11 小林多喜二の「不在地主」と「防雪林」
- 12 和田伝、犬田卯、悦田喜和雄、佐左木俊郎の作品
- 13 この章まとめ

第五章 プロレタリア文学運動を背景に

（一九二七—一九二九）

1 農民文学の領域に台頭してくるプロレタリア作家

この章は、昭和二―四（一九二七―二九）年にあてられる。前章においてみたように、大正末期からそのきざしの現われた、プロレタリア文学運動の側の作家たちによる、農民文学作品の制作、そして、プロレタリア文学運動の機関誌に発表される、その作品の数量は、昭和期にはいつて、顕著な増加をしめしてくる。今回とりあげるつぎの作家の顔ぶれのうち、プロレタリア文学運動の圏外にあったのは、劇作家の真船豊と永田衡吉のみである。西光万吉「足」（昭和二年一月『文芸戦線』）、「穀種」（二年三月『解放』）、「ストライキ」（二年八月『プロレタリア芸術』）、「冬の夜」（二年十一月『文芸戦線』）

里村欣三「娘の時代」（二年四月『文芸戦線』）

真船 豊「寒鴨」（二年八月『早稲田文学』）、「残された二人」（二年十一月『早稲田文学』）

永田衡吉「断崖に近い蜜柑畑」（二年八月『早稲田文学』）、「信州義民伝」（三年七月『中央公論』）

本庄陸男「北の開墾地」（三年四月『前衛』）、「移住する彼の家」（三年七月『戦旗』）、「馬と人間達」（三年八月『創作月刊』）、「秋空の下」（四年二月『戦旗』）

山本勝治「十姉妹」（三年五月『文芸戦線』）

黒島伝治「農夫の鞭」（三年一月『文芸戦線』）、「氾濫」（三年七月『改造』）

もっとも、これらの人びとは、黒島伝治を除いて、いずれも次回にあつかう立野信之、鹿地亘、丸山義二、中野重治、片岡鉄兵、細野孝二郎、小林多喜二らとともに、この時期に台頭してきた作家たちであって、旧来の農

民文学作家たちが、影をひそめたわけではもちろんない。それは、いずれあさらかにされていくはずである。

2 西光万吉の一連の劇作品、里村欣三の「娘の時代」

では、西光万吉（一八九五—一九七〇）〈明治二八年四月—昭和四五年三月〉の作品から。

西光万吉は、本名清原一隆。大正一一（一九二二）年三月創立された、部落解放運動の全国水平社の生みの親の一人である。

「全国に散在する吾が特殊部落民よ団結せよ／長い間虐められて来た兄弟よ、過去半世紀間に種々なる方法と、多くの人々によってなされた吾等の為めの運動が、何らの有難い効果を齎らさなかった事実は、夫等のすべてが吾々によって、又他の人々によって毎に人間が冒瀆されていた罰であったのだ……この際吾等の中より人間を尊敬する事によって自ら解放せんとする者の集団運動を起せるは、寧ろ必然である」と書き出され、「人間を勵（いた）める事が何のであるかをよく知っている吾々は、心から人生の熱と光を願求礼讃するものである／水平社はかくして生れた／人の世に熱あれ、人間に光あれ」と結ばれた、水平社創立の歴史的な宣言は、この西光万吉の起草になるものといわれる。

奈良県南葛城郡掖上村（現御所市）柏原北方の生まれで、この北方は、旧名山崎とよばれた、未解放部落である。真宗本願寺派の末寺西光寺が生家で、その住職清原道隆の長男。西光万吉の筆名は、ここから出ていた。彼が自分で被差別部落の出身であることを知ったのは、小学校のころからだ。が、県立敵傍中学校（現敵傍高校）では、教師や生徒たちから冷たい眼で見られ、二年生の秋に、本山本願寺の経営する京都の平安中学（現在の平安

高校)に転学した。すると、畝傍中学から移ってきた体操教師の口から、彼の「身分」が伝わり、一年あまりでまた退学を、余儀なくされねばならなかった。このあと、西光は、絵画を志し、大正三年春の二科展に入選したが、第一次大戦後の内外のデモクラシー思潮、社会主義思想、人種的差別撤廃運動などに、強い影響を受け、被差別部落解放運動を志すとともに、地主制度に苦しむ小作人のために、未解放部落内の農民組合づくりに努めた。

やがて彼は、日本農民組合常任委員に挙げられて活動、そして大正一四年一二月、結党即日解散を命じられた、農民労働党の創立に参画、その翌年三月、労働農民党(労農党)が新たに結成され、その後昭和三(一九二八)年二月、第一次普通選挙にさいして、労農党の公認として、奈良県から立候補、惜敗した。これよりさき、西光万吉は、一九二六年一二月、一九二三年六月の第一次検査後に再建された、日本共産党員に推せんされ、水平社ならびに日農本部のフラクションとして活動したが、一九二八年の三・一五事件で逮捕、懲役五年の刑で、奈良刑務所に下獄、「服役」した。

ここにとりあげる彼の作品は、いずれも戯曲で、彼が三・一五事件で検挙されるまでのものであるが、このような経歴をもつ作者の、地主制度に苦しめられている小作農にたいする深い愛情が書かせたもので、この四編に關するかぎり、とくに未解放部落民の問題を、主題にしたものではない。

「足」。一幕物。時は現代、夏、八朔の前夜、所、京阪地方の農村、人、芳造(四五歳、料理屋の亭主)、おかね(四〇歳、芳造の妻)、花子(二二歳、酌婦)、梅子(一九歳、酌婦)、太吉(五〇歳、小作人)、藤平(六〇歳、小作人)、太市(二〇歳、太吉の伴)、お客AとB、車夫、幼児。貧弱な料理屋のんき亭が舞台である。

電灯のついた店の表で、子を抱えたおかねと、腰をかけた太吉、藤平と話している。明日は八朝、いつもなら地藏院で踊りだが、今年は裁判所行きや家財の差押え、その上まだ田地まで地主はとりあげようとしている二人の話を、小作の家に生まれ、料理屋の女房になっていても、二反ばかり小作をしているおかね「ほんまになあ」と同感。客A、B、奥へはいっていき、花子、そのサービスにいく。二人の小作人は、藤平をまた明日裁判所によび出されているが、地主側の証人に出るはずの芳造と話合うためにきたのだったが、芳造は朝から新家（地主）の旦那と、大阪へ足を買いに行つたとおかねから聞いて、「おいらの来たことも、いわんといてくれ」と、二人出て行く。

おかね、ぼんやりすわっているところへ、車夫、大きな信玄袋、二本を一つに重ねた古い義足をもって「大將が今帰らりましたで」。つづいて芳造、松葉杖、靴をはいた新しい義足ではいつてきて、釣銭いらぬと車夫に金をやつてかえす。芳造がつれてきた梅子、おかねにあいさつ。お客が二人きっていると知って、芳造、さっそく梅子を座敷へやる。おかね、芳造に「もう裁判所なんかへ行かんといて」と頼むと、芳造「黙っとれ。これから新しい座敷もたてたり……」そして大腰以下義足をとり上げて「立派な足やろ」。

お客A、スポーツ刈りで眼鏡をかけた太市の腕をもって、引っぱってくる。お客B、梅子、花子も来る。芳造、客たちと梅子を座敷へ返し、花子に「なんの相談していた」花子とりあわず奥へ行く。芳造、太市に「ひとのうちへ来るのに表からよう来んのか。金のかかった女はつれ出せんぞ。あの十円はどうなってる」太市「二、三日待ってくれ」芳造、太市を罵り、おかね「もうええやないか」と芳造をなだめ、太市に「早う帰っとくなはれ」。奥で、梅子の三味線、小原節の唄こえ。一たん去った太市、表からそつとはいってきて、芳造の新しい義足を

両足ともかえて飛び出す。芳造「だれや」おかね「あんたの足がおまへんで」芳造「なに」おかね、表へかけだし、むざんに折られた二本の足をぶらさげてくる。芳造、古い足をつけて「今から、新家の旦那へいてくる。おのれ、ようもこんなことさらした。村の小作のやつら、かたっぱしから田も畑もとり上げたるぞ」。

芳造、折れた両足を背にぶら下げて出て行く。奥ではいよいよ陽気な唄、三味線、太鼓。おかね、子供を抱き、夫を見送って涙をふく。やがて涙がとめどもなく流れる。

わたしは、この作を原稿で読んで、西光万吉が戯曲を書くのをはじめて知ったわけだが、この作が発表された、その号の『文芸戦線』の編集後記に、わたしは作者を紹介して、こう書いていた。「創作欄の新顔『足』の作者の西光万吉君について一言紹介を述べておきたい。同君はわが国水平運動になみなみならぬ功績があり、現に日本農民組合の争議部長として活動しつつある闘士である。無産者文壇は、ここにまた新しき一人の有力な作家を加えたのは慶賀に堪えない」。だが、このときから一年後の三・一五事件は、わたしの囑望したこの作家の創造力をさらに発展成長させる条件を、うばったのであった。

つぎに「粃種」。これも一幕ものである。時は、享保の頃の凶年、所は畿内地方の農村、百姓宇平（六〇歳）、その病める女房（六〇歳）、伴の嫁おいく、甥作造（二〇歳）、百姓嘉衛門（五〇歳）、その娘おはる（一八歳）、百姓五人、役人三人が人物で、春、八十八夜頃の俗に苗代のおれと呼ぶ寒い日、うらわびしく煤けた、百姓宇平の家を舞台に、血も涙もない代官権力を背景に、宇平、嘉衛門のせっぱつまった知恵と犠牲で、百姓としては何としてもそうしなければならぬ八十八夜に、粃種が蒔かれるという、そのギリギリの営みを描いたものである。米俵と偽って、土と藁屑の俵をお上におさめて、役人に引き立てられていく嘉衛門の一俵と、宇平がしまってい

た一俵とで、苗代地に粃種は蒔かれる。しかしその反面、その百姓たちのときの声があがるとき、宇平も、嘉衛門の娘おはるも、宇平の家で倒れていたのである。

「ストライキ」。これもやはり一幕の農民劇。時は現代、初夏の午前である。所は京阪地方の農村。人は農民梅吉（四〇歳）、その女房おみね（三〇歳）、長男梅太郎（一八歳）、次男梅二郎（一一歳）、老母およね（六〇歳）、農婦やえの（四〇歳）、娘つたの（一七歳）、ほか農民、女房等で、小作争議に学童ストをからめ、結末は悲劇となるもので、小作百姓梅吉の家が、舞台である。

幕があくと、また行商の旅に出ていこうとする梅太郎に、およねが、仕立ててやった縞の単衣を着せてみせる。梅太郎はその朝の新聞に、昨日の裁判で、地主側は立入禁止の田地にはいつて、管理耕作をすることになった、と出ているのを、およねに告げて、おどろきあう。そこへ、梅吉と一人の農民がはいつてきて、組合員全部事務所に集まる相談をし、急いでその農民、出ていったあと、梅吉、梅二郎のいないのに気がつき、おみねを呼んできくと、今日は試験で学校へ行ったという。ストライキがわからんのかと、梅吉怒り、梅太郎に呼んでこいというが、先妻の子の梅太郎、おみねの気をかねるので、梅吉、自分で出かけていく。

このあと、おみねと梅太郎、困った事態について話し合い、おみね、現に算笥、長持まで差押えられ、立入禁止の田地へ、地主側がはいるそうやのに、子供の学校行きばかりやいやいという気が知れん、とこぼす。梅吉、泣いている梅二郎を荒々しくひっぱって帰り、梅太郎、さりげなく畑へちよつとといつて、鍬をかついで出ていく。梅吉とおみね、学童ストのことからいい争いが激しくなり、別れ話にまでおよんできて、およね、静かに出てきて仲にはいい、梅吉、催促にきた先刻の農民と出ていく。このあと、梅二郎、裏からまた学校へ。およね「子供

はな、皆あんなものや。まあええ、まあええ」そして、梅太郎の作ったトマトの話をし、「畑だけは立入禁止もうて安心や」。

やえの、その娘のつたの、前後してはいってきて、箆筒、長持、鏡台、明日中におとどけいたしますさかいとあやまりにくる。二人が帰ったあと、およね、おみね、うちは嫁入り娘がのうて、まだしも幸いているなどと話しあう。……と、「皆いってくれえ、谷の六反田で斬合いや、地主側と、鍬で斬合いや、小作のものは皆いってくれえ」と女の声。おみね、顔色かえて、およねと顔を見合わす。やがて、血みどろの手拭で頭部をおさえた梅太郎が、かつぎこまれる。おろおろと梅太郎を呼ぶおよね、水を飲ませるおみね。梅太郎、おみねに、梅二郎のことをたずね、淋しく微笑、「地主の子が行きや、小作の子も行きたがる。あたりまえだす、ハハハ」そして、力なく横に倒れる。男、医者へ走り、その名を呼びつづけていたおよね、おみね、気のぬけたごとく、梅太郎を見まもる。表から、やえのがまたおずおずとはいってくる。やえの「ごめん。ごめん」とよんで、ここで幕となる。

もう一編「冬の夜」をみよう。

これも一幕にまとめたもの。時、現代、冬、所、やはり京阪地方の農村、小作人善平（六〇歳）、同藤七（六〇歳）、同作造（四〇歳）、同良吉（四〇歳）、同嘉助（二〇歳）、娘おうめ（一八歳）が人物。舞台は、小作農家の納屋の内部、外は霜夜である。上手に電灯をぶらさげ、嘉助が足ふみの縄ない器械で仕事をしている。裏山で梟の声。

嘉助、農に生まれて農に生き……とうたっているところへ、おうめ、忍び足ではいってくる。嘉助、器械をと